第 20 回 「まちの活性化・都市デザイン競技」の結果概要

主　催：まちづくり月間全国的行事実行委員会、公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター
後　援：国土交通省、松戸市
事務局：公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター

■趣　旨

これからのまちづくりにおいては、そこに生活し活動していることの豊かさが実感でき、誇りのもてる優れた景観を備えた環境整備が重要になっています。現代の活動にふさわしい新たな都市景観の形成には、まちの歴史や環境に配慮しながら、その都市固有の品格を備えた洗練された表現と演出が求められ、その魅力が都市に活力を呼び戻し、新たな賑わいを伴って、まち全体が活性化していくことが期待されます。

こうしたまちづくりの課題を踏まえ、本「まちの活性化・都市デザイン競技」は、地域にふさわしい整備構想とまちのデザインについての提案を広く一般から募り、まちづくりに対する国民の関心を高めるとともに活力ある美しい景観を備えたまちづくりの実現に寄与することを目的として、平成 10 年度より毎年実施しており、今年度で第 20 回目を数えます。

■対象地区

今年度は、千葉県松戸市の中心市街地の玄関口となるＪＲ松戸駅及び新京成電鉄松戸駅（以下、「松戸駅」という。）から概ね半径 350m 圏内のエリアに加えて、松戸市庁舎のある街区、松戸駅東口の相模台から中心市街地を貫き、西口の自然豊かな江戸川河川敷の親水空間までの道路（以下、「シンボル軸」という。）を含めた区域を「松戸駅周辺地区」（約 48ha）として対象地区に選定しました。

■募集内容

１．対象地区の現況と課題、整備の方針

対象地区は、中心市街地の玄関口となる北は都市計画道路 3・4・11 号、南は 3・4・9 号、東は相模台、西は 3・5・28 号に挟まれたエリアに加えて、松戸市庁舎のある街区、「シンボル軸」を含めた松戸駅周辺地区（約 48ha）とします。当該地区は、昭和 40 年代に土地区画整理事業を実施したものの、都市基盤の更新時期を迎えており、新たな街づくりが課題とされています。平成 27 年 6 月策定の「松戸駅周辺まちづくり基本構想」では、松戸駅を中心に「新拠点ゾーン」「商業・業務ゾーン」「都心居住ゾーン」と 3 つのゾーンに区分し、その他に「シンボル軸」と位置づけています。

松戸市は、江戸川を挟んで東京都と埼玉県に隣接する人口約 49 万人の都市です。松戸駅周辺は、古くは水戸街道の松戸宿が置かれ、近代以降も千葉県東葛飾地域における行政や商業の中心地として栄えておりました。また、高度経済成長期には東京の住宅需要の受け皿となる生活都市として発展しましたが、成熟期に入り現在は都市の更新時期を迎えています。

松戸駅東口においては、駅前広場が未整備のため、バス乗り場が離れた場所に設置されており、交通結節点としての機能が弱い状況となっております。また、同駅西口においてデッキと地上部とを行き来する移動手段のバリアフリー化がなされていない状況となっており、東西口とも一方通行の道路が多く、歩行者空間も充実しているとはいえない状況です。

そうしたことから、松戸駅西口駅前広場デッキにおいて、平成 30 年 6 月の完成を目指し、市によるエレベーターやエスカレーター等を設置するバリアフリー化整備を進めており、今後、ＪＲ東日本によるラチ内のバリアフリー化、新駅ビルの建設なども計画されています。

松戸中央公園

主要地方道松戸停車場線（県道）
（シンボル軸一部）

駅東口デッキ

戸定邸

２．提案募集の内容

本競技は、上記の現況と課題及び整備の方針等を踏まえた上で､｢都市機能の更新に合わせた松戸の顔となる相模台（新拠点ゾーン）から江戸川までの道路（シンボル軸）における、新たな街の魅力を引き出すランドスケープデザインやアイデアの創出」をテーマに、松戸市の玄関口である松戸駅周辺の都市機能の更新に合わせ、既存の地域資源を活かしながら、“ひと”の回遊性・滞留性を生み出し、新たな街の魅力を創生することで、賑わいの中にも風格のある都市となるようなランドスケープデザインや様々なアイデアについて、次のような提案を求めたものです。

①相模台（新拠点ゾーン）

相模台の官舎跡地（国有地）や法務局跡地（国有地）のほか、松戸中央公園や相模台公園を含めたエリアを「新拠点ゾーン」と位置づけています。

新拠点ゾーンにおいて、国有地の活用により、市庁舎を含めた松戸駅周辺に点在する図書館や市民会館などの文化施設を集約することをひとつの方向性として、松戸中央公園と相模台公園の集約による再整備により、公園の緑と各施設が一体となった空間を形成し、新たなランドマークとなるような多機能拠点のデザイン、コンセプトを求めます。

②松戸駅西口及び東口

市街地再開発事業が検討されている松戸駅西口及び東口では、駅周辺の水辺・歴史資源が調和した中心商業地を形成し、多くの人が訪れ、賑わいを高めるためのアイデアや街並みのデザインを求めます。

③相模台から江戸川までの道路（シンボル軸）

シンボル軸において、みどり豊かな都市空間の形成や快適な歩行者空間の創出、良好な景観形成が図られ、シンボル軸周辺のエリアへも波及するような道路修景、ファサードデザインを求めます。シンボル軸は､｢松戸駅周辺地区」から江戸川河川敷まで到達する県道及び市道ですが、江戸川河川敷には、坂川の水を取り込んで浄化施設で処理して流下させる「ふれあい松戸川」が整備されており、今では、多様な生物が生息する豊かな自然空間を形成しています。これらを踏まえ、シンボル軸沿道における修景の連続性を確保するために、同地区から江戸川河川敷にまで及ぶ区間に対し、江戸川河川敷の水辺空間を生かした自然とのふれあいや人々の交流活動が生まれる景観形成の手法等のアイデアを求めます。

なお、松戸駅東口から新拠点ゾーンまでのアクセス性の向上を踏まえた歩行者空間の連続性を確保するため、周辺建物の再配置も含めて検討して、差し支えありません。

④提案全体の基本的な配慮事項

都市計画マスタープランや松戸駅周辺まちづくり基本構想等で示す当該地区におけるまちづくりの方針を尊重してください。

３．応募図書

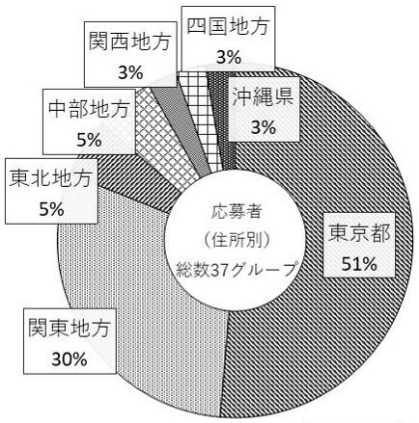
上記の募集内容に即して、対象地区の整備構想、主要な提案空間のデザインイメージ、実現化方策などをＡ２サイズのパネル２枚に表現したものと、提案の要旨をＡ４サイズ１枚にまとめたものを応募図書として提出を求めました。

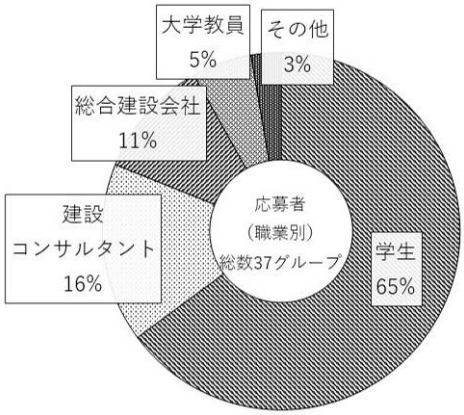
■スケジュール

応募登録	平成 29 年　9 月 4 日（月） ～10 月 2 日（月）
現地説明会	平成 29 年 10 月 23 日（月）
質疑応答	平成 29 年 10 月 23 日（月） ～10 月 30 日（月）
作品提出	平成 30 年　2 月 27 日（火）
審　　査	平成 30 年　3 月 27 日（火）
表　　彰	平成 30 年　6 月 15 日（金）

■応募件数・応募者の属性

事前の応募登録数が 60 グループあり、最終的に提出された応募作品数は 37 でした（応募者の属性は円グラフを参照）。





■審査委員会及び結果

１．審査委員会

委員長　西村幸夫　東京大学教授
委　員　石川幹子　中央大学教授
　　岸井隆幸　日本大学教授
　　高見公雄　法政大学教授
　　藤本昌也　建築家
　　徳永幸久　国土交通省市街地整備課長
　　本郷谷健次　松戸市長

審査方法等の確認：審査を始めるに当たって、審査の内容・方法等について確認されました。

第一次審査：審査委員が各作品を一通り閲覧したうえで、一回目の投票が行われ、有望作品として十数点あげられました。

第二次審査：有望作品一つ一つについて議論された後、二回目の投票により入賞候補作品が絞り込まれました。

最終審査：　入賞候補作品を並べて、相互に比較検討しながら大臣賞をはじめ各受賞作品が選定されました。

２．審査結果

審査委員会での審査の結果、下記の入賞作品が選定されました。

※松戸市長特別賞は松戸市により選定されました。

○国土交通大臣賞（1 点）
・・・賞状及び賞金 50 万円

（株式会社久米設計）
久野恭平、石田哲史、岩倉圭介、雲越祐司、早坂駿、長田滉央

○まちづくり月間全国的行事実行委員会会長賞（1 点）
・・・賞状及び賞金 25 万円

（大成建設株式会社）
石田武、川﨑泰之、半澤武夫、横石めぐみ、後藤将人、野島僚子、大西真由、平賀順也、黒江由美、石井かおる

○（公財）都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞（1 点）
・・・賞状及び賞金 15 万円

（社会環境設計室）
金城正紀

○奨励賞（2 点）　・・・各賞状及び賞金 10 万円

［奨励賞１］
（戸田建設株式会社）
加藤千尋、今吉浩一朗、太田潮、小田健人、河本淳史、渋江優人、日比野和人、本多祐二、本田くるみ

［奨励賞２］
（千葉大学大学院園芸学研究科）
亀井優樹、許韜、蘇荻、南宏

○松戸市長特別賞（1 点）　・・・賞状及び記念品

（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
地域デザイン研究室+都市デザイン研究室）
新妻直人、伊藤智洋、中戸翔太郎、永門航、萩原拓也

■入賞作品の概要

入賞作品の概要は次頁以下の通りです。詳細は（公財）都市づくりパブリックデザインセンターのホームページ（下記ＵＲＬ）をご覧ください。

http://www.udc.or.jp

国土交通大臣賞

応募者：株式会社久米設計
［久野恭平、石田哲史、岩倉圭介、雲越祐司、早坂駿、長田滉央］

「Green Neighborhood Matsudo ～ヒト × チエ × マチをつなぐコンパクトな郊外都市モデル～」

今ある都市構造を活かし回遊性を向上させる＜都市基盤＞、分析から見えてきた松戸の特徴「自然」をアイデンティティとして強める＜自然環境＞、住んでいる人が快適に過ごせるだけではなく松戸に訪れて買い物や滞在を楽しみたくなる＜生活環境＞、松戸に住むアクティブシニア等の人材を活かし、他都市とも連携できる＜産業創出＞、多様な人々が交流し、にぎわいを生み出す仕組みづくりである＜エリアマネジメント＞を提案する。

住む人（ヒト）と訪れる人（ヒト）が交流しにぎわいを生み出し、松戸に集まる人々の知恵（チエ）がつながることで新たな産業を生み出し、周辺の街（マチ）ともつながる新しい郊外の再生モデルとして松戸をリ・ブランディングする。

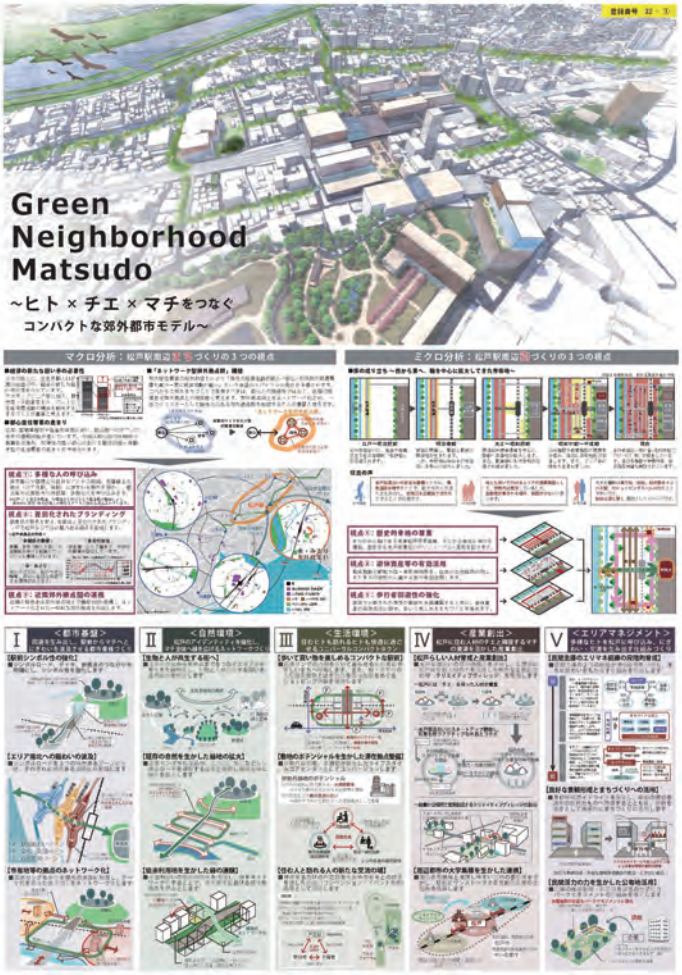
Ⅰ＜都市基盤＞　回遊を生み出し、駅前からマチへとにぎわいを波及させる都市骨格づくり

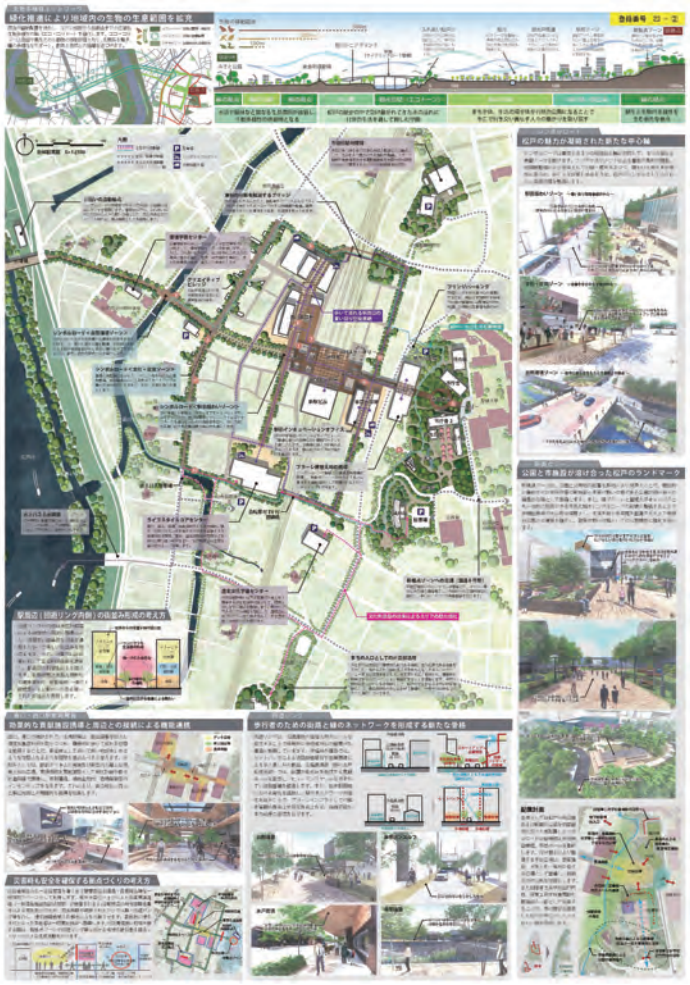
Ⅱ＜自然環境＞　松戸のアイデンティティを強化し、マチ全体へ緑を広げるネットワークづくり

Ⅲ＜生活環境＞　住むヒトも訪れるヒトも快適に過ごせるユニバーサルコンパクトタウン

Ⅳ＜産業創出＞　松戸に住む人材のチエと隣接するマチの資源を生かした産業創出

Ⅴ＜エリアマネジメント＞　多様なヒトを呼び込み、賑わい・交流を生み出す仕組みづくり





審査講評

首都圏近郊の人口増加がなお続く市の中心部の作り直しといった複雑で難しい課題に正面から向き合い、コンセプトが一番しっかりした、全体として非常に高い出来栄えである。

多面的で緻密な現状分析に基づいて、都市の文脈を読み込み課題全体にしっかりと答えようとし、新拠点、駅、河川との連携についてよく考えられ、松戸駅を中心とする回遊性も明確であり、戦略プランを作り出し、実現していく力がある提案となっている。解決策まで良くできた都市デザインの提案を行っている。

＜空地＞のあり様を考え、そのあり方に従って建築のあり方を求める都市デザインの基本に則り、＜空地＞の骨格をつくり出す＜街路＞のあり方を単に交通空間として捉えず、市民の生活空間の基盤として見直し、その性格付けを行って整備手法を提案している。街路の性格に従って、建築の機能、形態のあり方を提起している作法が評価されたと言える。

新拠点の市役所等の建物配置により珠玉のオープンスペースが分割され公園空間を分断していることが都市デザインの観点から問題となった。また、新拠点のオープンスペースについての役割と周辺との関連が明確であればよりよい物になった。

まちづくり月間全国的行事実行委員会会長賞

応募者：大成建設株式会社
［石田武、川﨑泰之、半澤武夫、横石めぐみ、後藤将人、野島僚子、大西真由、平賀順也、黒江由美、石井かおる］

「Next Matsudo Debut.
～一人一人が主役となる、まちと緑と水の舞台～」

現在の松戸は市街地の更新が進まず、周辺都市の開発や郊外部の開発に比べて魅力が薄れており、都市を更新していくことが課題となっている。また、市民ニーズに応えた上で様々な分野で活躍している市民の力を活かすことができれば、もっと発信力のあるまちにすることができると考えられる。

このような状況を変えていくために、高台の低未利用地を活用した新拠点の形成と南北軸に比べて弱い東西軸の強化をアクションプランの柱として、相模台と江戸川を回遊する新しい市街地を形成していくことを提案する。

Action Plan1
緑豊かな新拠点『Stage』（舞台）を形成して新たな魅力創出

【相模台整備】
豊かな緑とゆったりとした空間を継承、地下空間に拠点機能を導入して市街地と相模台をつなぐ賑わいを形成

【斜面緑地整備】
相模台の斜面緑地を市街地に向けて回復させて新拠点の顔をつくり、市街地から高台に向かう人の流れを創出

Action Plan2
シンボル軸の強化とコミュニティ軸の創出による東西軸の強化

【シンボル軸の強化】
西口・東口再開発と合わせてシンボル軸のシンボル性を強化し、来街者にも快適な『Runway』(花道)を整備

【コミュニティ軸の創出】
相模台・江戸川を結ぶ魅力的な『Pathway』(小路)を整備

審査講評

新拠点から都市軸そして江戸川を越えて富士を望む構図は雄大で、新拠点のオープンスペースのデザインは緑の中に賑わいがあり、生き生きとした、のびやかな新拠点のデザインが魅力的な提案であった。

丘の上をできるだけオープンにし、積極的に利用する意欲的提案。その手法として、市民ホールと駅の間を地下でつなぐ案で面白い素晴らしい発想により、新拠点と駅との接続、連携についてよく考えられ、シンボル軸の扱いも良く出来ている。

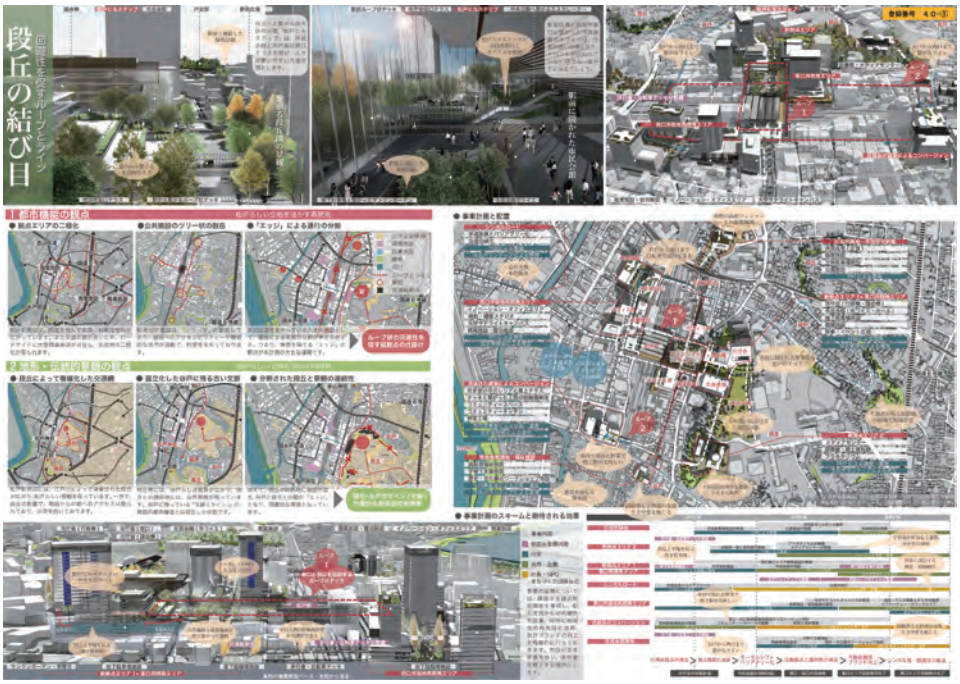
都市デザインを＜空地＞、つまり＜地＞の空間として捉え、建築の環境化を図ろうと挑戦している。＜地＞と＜図＞をつなぐ中間工作物（デッキ）を媒介して大地と高台をつなぐ空間デザイン手法は、これからもっと注目されてよく、今後の活動が期待されるが、提案自体は十分にこなされていない点で議論が分かれた。特に、地下空間利用の提案が最善であるかに関しては、全体像が十分に表現されておらず、コストの課題もある。新市役所の地下階の執務環境の問題、市民ホール以外の公園との連携について不十分等審査員の意見が分かれた。

また、要求された宿題にほぼ答えている点を評価するものの、都市デザインとしての打ち出しに一層の工夫も求められた。

(公財) 都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞

応募者：社会環境設計室 ［金城正紀］

「段丘の結び目　回遊性を促すループとライン」



施設・交通結節点の ループ状の配置と 「松戸ヒルステップ」

ループ状の施設と交通結節点の配置に加えて、新拠点の場所性を高めるため、特に東口の駅前広場には、市民会館のホワイエと市庁舎の窓口テラスを設け、人々が集まる仕掛けをつくる。段丘へと繋がる「松戸ヒルステップ」は、街の回遊とシンボル軸のはじまりを担う。

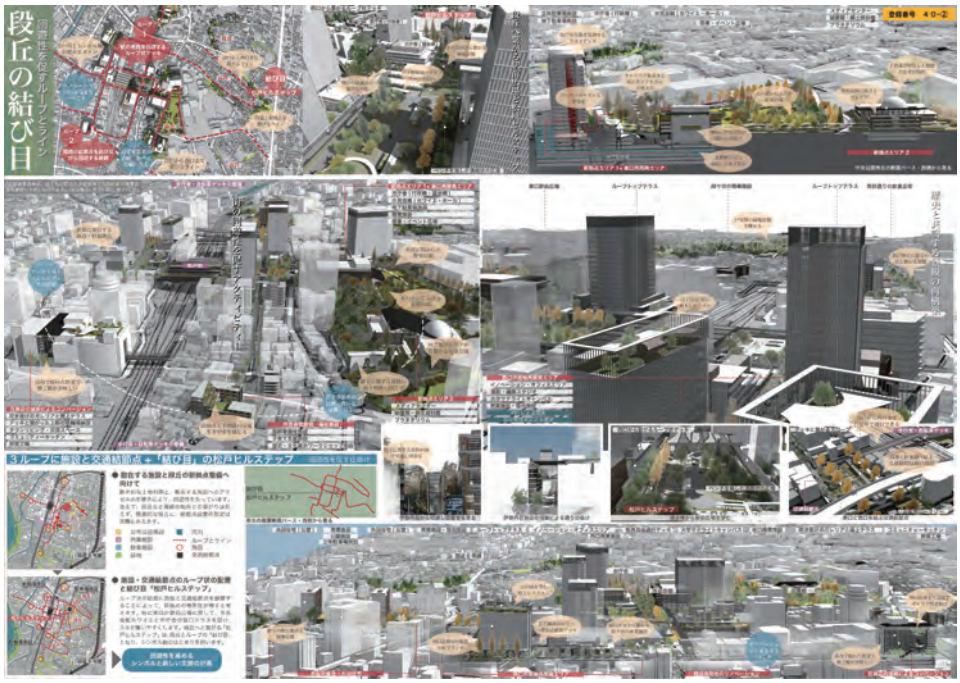
ループ状の回遊性を促す結節点の仕掛け

＋

段丘・谷戸のライン（文脈）が繋がる駅周辺の再開発

＋

回遊性を高める シンボルと新しい文脈の計画



審査講評

丁寧な現状分析に加え、東側の国道 6 号までを含めた広域的な視点で地域の将来像を描き出そうという意欲を感じる提案で、他の作品には見られない幅広い視野を示している。

平面計画としては＜地＞と＜図＞の関係を丁寧に考えての提案であり、松戸の地形をうまく利用し、段丘上のオープンスペースを大きく残し、松戸駅からの軸線を明確に挿入した点が評価された。

表現方法も写真や 3 DCG に全力を挙げ、一気通貫に伝える手法は分かりやすい表現となっていて、他の作品とは異なる物で新たな可能性を示している。表現の手法として今後活用されることを期待。

オープンスペースや（樹木）の将来像の表現をインパクトのある具体的な表現とし、一層の魅力づけを望みたい。

また、立体的な建築手法としては、巨大建築化に安易に流れすぎ、20 世紀型の再開発的事業手法を越えていない点が問題になった。まちづくりにおけるヒューマンスケールの大切さを意識した都市デザイン手法を考えてほしかった。

奨　　励　　賞

応募者：戸田建設株式会社
［加藤千尋、今吉浩一朗、太田潮、小田健人、河本淳史、渋江優人、
日比野和人、本多祐二、本田くるみ］

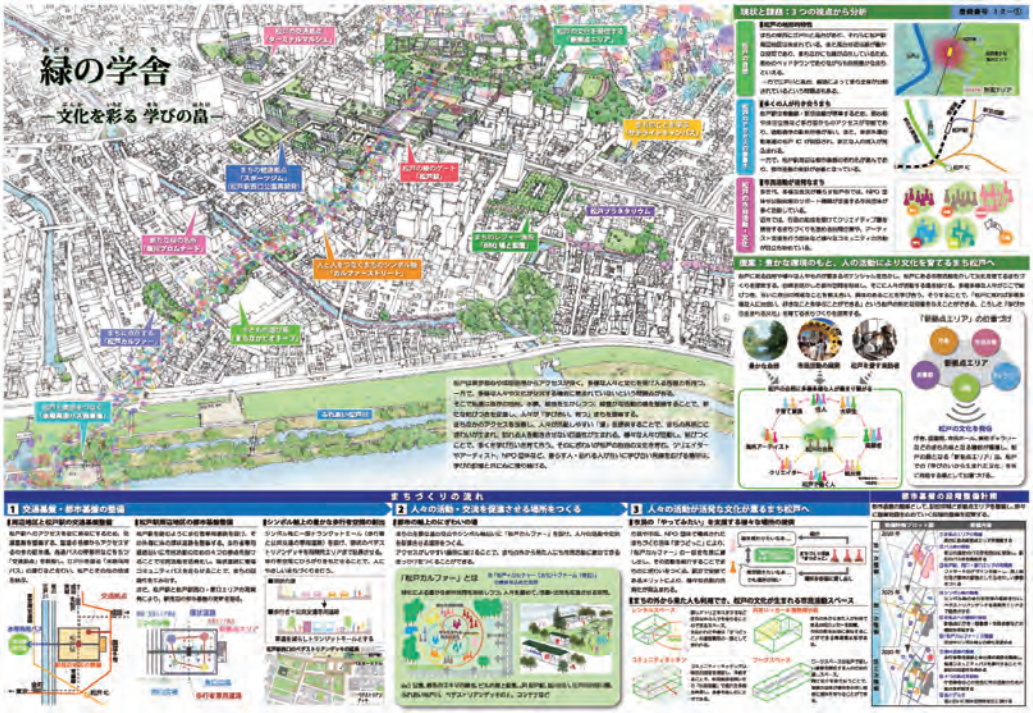
「緑の学舎（まち）　―文化を彩る 学びの畠―」

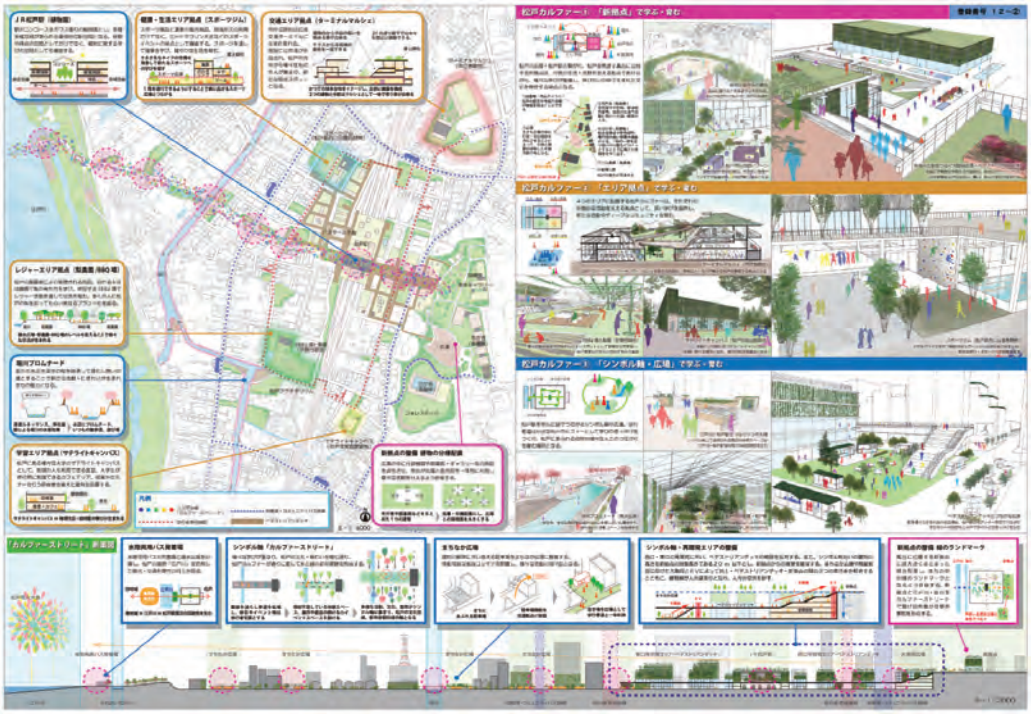
背景

松戸駅周辺地区は都心のベッドタウンでありながらも、自然豊かなまちである。また、関東の主要な鉄道各線の停車駅であるため、多方面からのアクセスが可能であり、更に東京環状自動車道の松戸 IC の新設によって新たな人の流入が見込まれる。
その一方で、鉄道や高低差によってまち全体が分断され、駅周辺の都市基盤の老朽化が進んでおり、より魅力的なまちにするためには早急な都市基盤の更新が必要となっている。

提案する松戸のビジョン

松戸の特色である「自然」をきっかけとし、多種多様な人をつなぐまちづくりを提案する。多世代、多様な住民が暮らす松戸市では多くの市民団体が活動している。
こうした既存のまちのコミュニティを活かし、まちなかにオープンな活動の場を設けることで、様々な人が集い・つながり・学び合うことができる。そうした学び合いから生まれる活動を育むととで、それが松戸の「新たな文化」となり、松戸を自然豊かな活気あるまちへと変えていく。





都市基盤の整備

歩行者空間に広がりをもたせるため、車道の一部を歩行者空間とし、ペデストリアンデッキを延長する。

文化を育む「松戸カルファー」

※「松戸＋カルチャー（文化）＋
　ファーム（育む）」の意味を込めた造語
まちの主要な道の交点やシンボル軸沿いに、「松戸カルファー」を設ける。「松戸カルファー」とは緑化による豊かな都市空間を形成しつつ、人々を留めて、活動・交流を促進させる空間である。
緑を取り入れた都市空間とすることで、まちの憩いの場となり、様々な人が集まるきっかけとなる。

審査講評

　カルチャー＋ファームというコンセプト、文化を彩る学びの畠というテーマで、都心でありながら緑豊かな空間を作り出している夢のある街づくり提案である。

　現状分析を含め丁寧な詰め方により、 細部の提案を正面から行っている姿勢に共感が持てる。多様な課題に丁寧に向き合い全体としてバランスのとれた回答の総合性を高く評価する。

　カルファーの実施プロセスに対する一層の提案等全体としてのコンセプトや提案により深みがあれば良い物になった。また、手慣れている感まであり、若手らしい元気さはやや不足していた。

奨　　励　　賞

応募者：千葉大学大学院園芸学研究科
［亀井優樹、許韜、蘇荻、南宏］

「松戸のとも（共・友・知）庭」

背景

松戸駅は、都内を除く関東地方で乗降客数が 12 位であり、多くの人が集まるエリアであるが、互いに交流する場所と機会がなく、ただ通り過ぎるだけになっている松戸には江戸川、相模台、戸定庭園、国立大唯一の園芸学部など、特徴的なランドスケープ資源があるが、十分に活かしきれていない。特に松戸駅周辺やシンボル軸では、緑が極端に少なく、「園芸学部があるまち」らしさが感じられない。緑地空間やオープンスペース、公共施設は分散して立地しており、市の活力を触発する拠点的な場所がない。まちを構成する個々の建物と公共空間は、敷地境界線によってはっきりと区切られ、まちや人々の交流を分断している。松戸に対する愛着が沸かない。

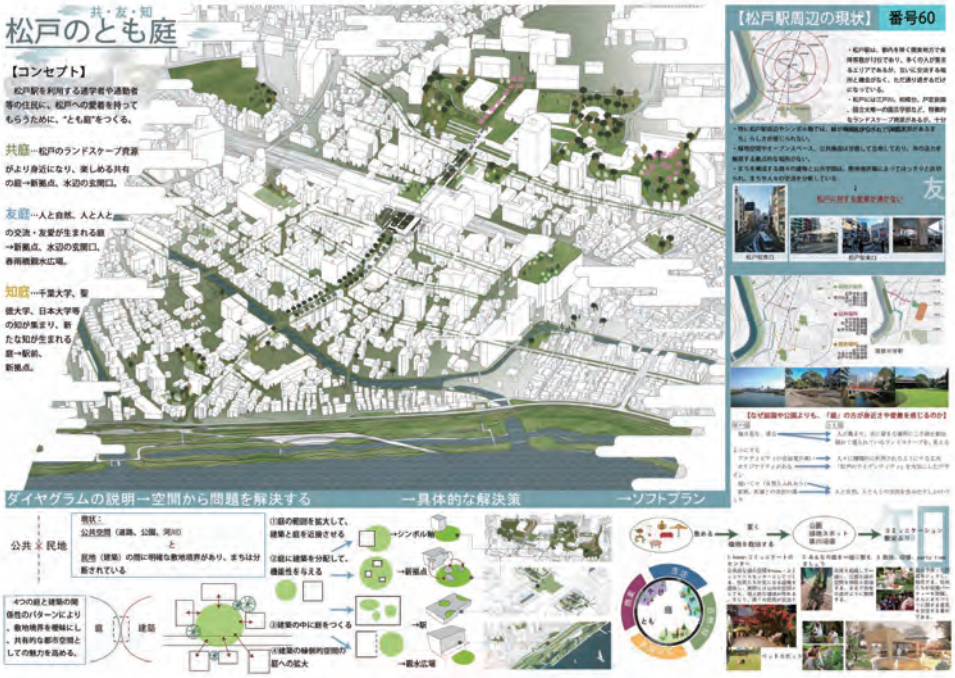
コンセプト

松戸駅を利用する通学者や通勤者等の住民に、松戸への愛着を持ってもらうために、“とも庭”をつくる。

共庭…松戸のランドスケープ資源がより身近になり、楽しめる共有の庭玄関口。

友庭…人と自然、人と人との交流・友愛が生まれる庭。

知庭…千葉大学、聖徳大学、日本大学等の知が集まり、新たな知が生まれる庭。



審査講評

緑をテーマにして地域を見渡し、緑とオープンスペースを中心として松戸都心部の将来構想を描き出している点が評価された。オープンスペース、緑の発想、提案は素晴らしく、水辺と緑地の関係性が丁寧にデザインされ、江戸川まで水を利用した街づくりが提案されている。

総合性という点では評価できないものの、全体を「とも庭」という１コンセプトで全体を貫き、解いている点は、この手のコンペとして好感が持てる。

＜空地＞の空間から問題を解くという空間デザイン戦略こそ、都市デザインの基本中の基本と高く評価した。

新拠点について、市役所跡地が無造作に扱われており、市役所等の床がボリュームとして収まるか等、建物の配置等の提案が不足している点が残念。

松戸市長特別賞

応募者：東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 地域デザイン研究室＋都市デザイン研究室
［新妻直人、伊藤智洋、中戸翔太郎、永門航、萩原拓也］

「寄る辺の津、いざなう瀬」

広域的に「津」＝拠点たる役割を担ってきた松戸。まちの「圏域の集約」がみられる今，新しくまちスケールでも「津＝つどい場」と「瀬＝かよい路」を道具に考えることで，まちの新たな役割を見出したい。

新たな「津」と「瀬」で まちを「寄る辺」に

これまでの「津」
物資や人の中継地であり集散地。渡し場や宿場町、乗換駅といった、2 つの圏域を繋ぐ機能がまちを作り上げてきた。

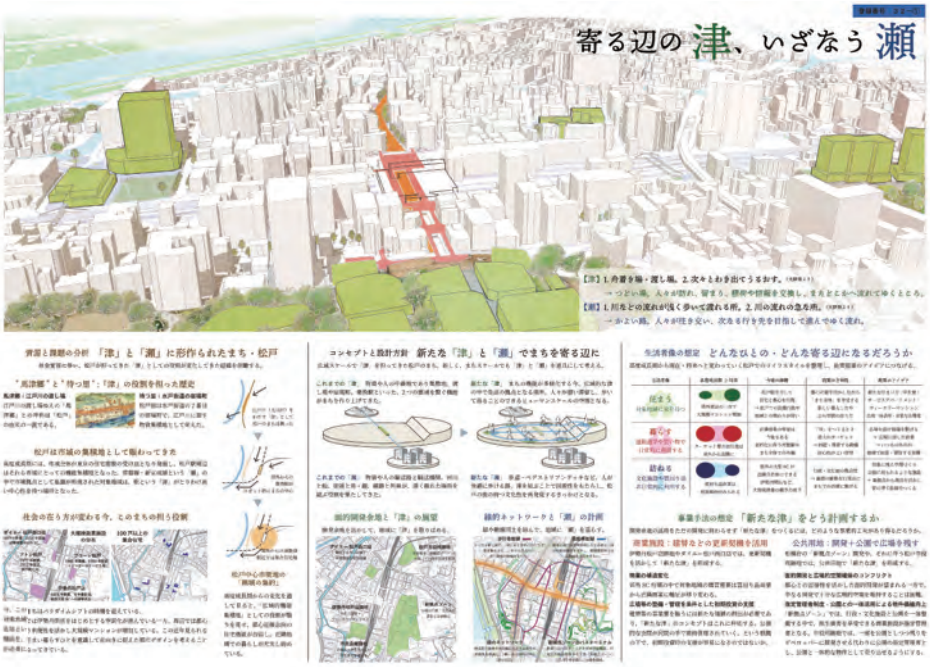
▼

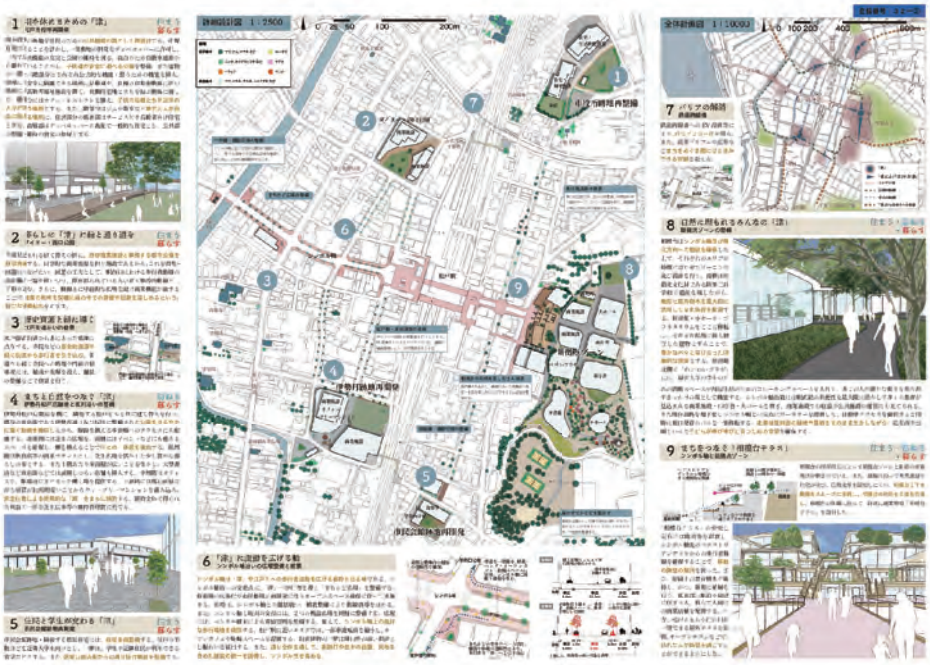
新たな「津」
まちの機能が多様化する今、広域的な津の中で生活の拠点となる場所。人々が憩い滞留し、歩いて巡ることのできるヒューマンスケールの空間となる。

これまでの「瀬」
物資や人の輸送路と輸送機関。河川と船、街道と馬・籠、線路と列車が、遠く離れた場所を結ぶ役割を果たしてきた。

▼

新たな「瀬」
歩道・ペデストリアンデッキなど、人が快適に歩ける路。津を結ぶことで回遊性をもたらし、松戸の街の持つ文化性を再発見するきっかけとなる。





審査講評

提案の全体を通じて、松戸の街の歴史的な文脈の中で重要な役割を担ってきた「津」と「瀬」に相当する空間概念を再評価し、それらが今後の街づくりにおいて「新しい津」と「新しい瀬」へと進化することによって、過去から現在、そして未来へと継承される「松戸らしさ」が表現されるとした魅力的な提案である。

面的役割を担う「寄る辺の津」では、新拠点ゾーンに移転・集約される多様な施設とそれら施設跡地における再整備のプログラムが、松戸駅周辺の現状と課題に対応した現実的な用途と施設規模に基づき、相互に連携しながらバランスよく提案されている点が評価される。また、線的役割を担う「いざなう瀬」が、対象地区が有する地形や既成市街地の特性を反映しつつシンボル軸と各施設を結ぶことにより、「住まう人」、「暮らす人」、「訪れる人」それぞれのニーズに応える機能と空間を有機的につなぐネットワークを形成している点が評価される。